

[特集：わが国の父親と親の役割]

2. 父親の不在と子どもの心の問題

¹⁾青山学院大学文学部・²⁾日本子ども家庭総合研究所

庄司 順一¹⁾²⁾ 谷口和加子²⁾

表1. 父親不在の状況

全面的不在	未婚(シングルマザー)
	離別 生別(離婚, 家出)
	死別
役割不在	単身赴任, 長時間労働

1 父親不在の状況

父親の不在といっても、その不在の状況はさまざまである。表1に示したように、未婚、離別によって、父親が家族にいない場合もあるし、家族に父親はいるのだが、父親役割(機能)を果たしていない場合もある。

子どもの心の問題には多くの要因が関係している、父親不在と一義的に関連づけるのは困難である。そのために、育児における父親の役割に関しては多くの研究がなされている(例えば、牧野・中野・柏木(1996)、大野(1998)などを参照)が、父親不在と子どもの心の問題について論じた論文は少ないように思われる。やや広く、父親不在が子どもに及ぼす影響を考えるにしても、例えば、父親が不在になった状況(すなわち、死亡したのか、母親との離婚によって不在となったのか)、父親が不在となったときの子どもの年齢、不在になるまでの家族関係(とくに夫婦関係)のありよう、父親不在を母親がどのように受けとめ、子どもにどのように伝えているかなどの条件を考慮しなければならない。さらに、家庭の状況(母親の就労、収入など)、家庭への支援の状況なども重要な条件といえる。このように検討すべきことは多いが、父親不在の家庭の多くを占めるのは、一般に母子世帯とよばれる家庭であろう。したがって、まず、母子世帯の状況を考える。

2 母子世帯の状況

母子世帯とは、「死別、離別その他の理由(未婚の

場合を含む)で、現に配偶者のない65歳未満の女(配偶者が長期間生死不明の場合を含む)と20歳未満のその子(養子を含む)のみで構成している世帯(厚生省大臣官房統計情報部「国民生活基礎調査」1998)である。ここには、母親の家族(親やきょうだい)と暮らしている場合は含まれない。

「国民生活基礎調査」(1998)によれば、母子世帯数は平成9年には約53万世帯ほどであり、これは総世帯の1.2%となっている。母子世帯数は、近年漸増傾向がみられる。

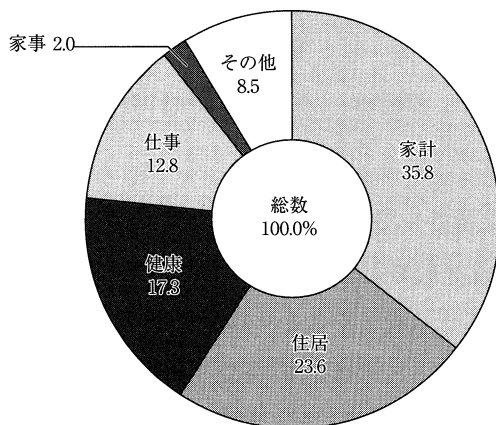
厚生省児童家庭局「全国母子世帯等調査結果の概要」(1995)によれば、母子世帯となった理由は、死別が実数、頻度とも減少し、離婚が増加している。平成5年では、死別が24.6%、離婚が64.3%となっていた。全体に占める数は多くないが、未婚の母は実数、頻度とも増加傾向を示し、約37,500世帯(4.7%)であった。その他は、遺棄・生死不明等である。

母子世帯の大きな問題は低所得であることであり、平成8年の1世帯当たりの平均所得金額は253.9万円であった。しかも、その中で稼働所得金額は174.0万円にすぎなかった。平均所得金額以下の世帯の割合が57.3%を占めていた(「国民生活基礎調査」(1998))。やや古い資料であるが、「全国母子世帯等調査結果の概要」(1995)でもう少し詳しくみると、表2に示すような状況であった。

このような状況にある母子世帯であるが、福祉に

表2. 母子世帯の家庭状況

	母子世帯全体	死別	生別	一般世帯
平均世帯人員(人)	3.03	3.32	2.94	3.13
平均有業人員(人)	1.19	1.35	1.14	1.57
平均収入金額(万円)	215	254	202	648
収入金額の中央値(万円)	169	201	159	549
世帯人員1人当たりの平均収入金額(万円)	71	77	69	207
有業人員1人当たりの平均収入金額(万円)	181	188	177	356
母親の平均年齢(歳)	41.7	45.8	40.2	
末子の平均年齢(歳)	12.0	13.9	11.4	



資料：厚生省児童家庭局「全国母子世帯等調査結果の概要」1995

図1. 困っていること

(日本子ども家庭総合研究所編：日本子ども資料年鑑第6巻，KTC中央出版，1998)

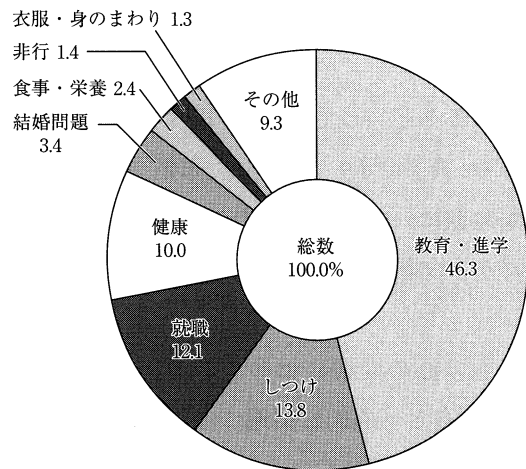
図2. 子どもについての悩み
(出典は図1と同じ)

表3. 父親不在が子どもに影響する要因

経済的困難
母親の疲労
父親モデルの不在
父親不在についての母親の受け止め方
家庭へのサポートの状況
心の傷(喪の作業の必要性)

かかわる公的制度の利用状況は、「利用している，または，利用したことがある」のは，福祉事務所 (29.5%)，公共職業安定所 (24.4%)，民生・児童委員 (20.0%)，母子福祉資金 (19.8%) などであり，経済的助成にかかわる制度が主に利用されているようである。また，「利用していない，または利用したことがない」人のうち，今後は利用したいとする人の割合もそれほど高くないようである。

さて，母子世帯の困っていることについては図1に示したように，家計 (35.8%)，住居 (23.6%)，健康 (17.3%)，仕事 (12.8%)，家事 (2.0%)，その他

(8.5%)となっており，家庭の経済的な面の困難さが目立つ。

子どもについての悩みとしては，図2に示したように，教育・進学 (46.3%)，しつけ (13.8%)，就職 (12.1%)，健康 (10.0%)，結婚問題 (3.4%)，食事・栄養 (2.4%)，非行 (1.4%)，衣服・身のまわり (1.3%)，その他 (9.3%)であった。このように母子世帯の母親は子どもについてさまざまな悩みを抱えているが，教育・進学についての悩みは経済的な問題とも関係が深いであろう。しつけ，非行，衣服・身のまわりの悩みは子どもの養育そのものにかかわる問題であり，注目する必要がある。

3 父親不在と子どもの心の問題

子ども時代に体験した重大なできごと (ライフイベント)が，子どもの心理や問題に関係することは容易に想像することができる。事実，いくつかの研究

は、子ども時代の体験とのちの諸問題との関連を明らかにしている。例えば、母親が死亡したり、両親が離婚した家庭の子どもでは、両親がそろっている家庭や父親が死亡した家庭の子どもよりも、夜尿の頻度は2倍以上高い(Douglas, 1973)。また、うつ病は児童期に親を亡くすことと関係がありそうであり、歪んだ家族関係は反社会的行動(非行)と関係がある(Rutter, 1972)。これらの研究は、両親または母親の状況と子どもとの関連を検討したもので、父親不在と子どもの問題とを直接に扱ったものではない。

このように父親不在と子どもの心の問題との関連を明確に示した研究はない。それは、子どもの問題は従来母親との関係で検討されることが多かったこととともに、前述のように、子どもの問題には多くの要因が関与しているからであり、たとえ何らかの問題がみられたとしても、それが父親不在の直接的な影響なのか、それとも父親が不在のための経済的困窮などの二次的な影響なのかを明らかにすることは困難だからである。子どもの心の問題と父親不在との関連を検討するにしても、父親が不在となったできごとや家庭の状況によって(表3)、影響のあり方に違いが生じよう。

ここでは、父親不在の状況によって子どもにどのような影響がありうるのかを考える。

1) 未婚の母

いわゆる未婚の母といっても、出産に至るまでの状況によって、子育てに取り組む態度もさまざまである。付き合っていた男性が、妊娠に気づいたとたん、逃げていってしまう場合もあり、このような場合、相手への怒り、憎しみから、子どもの養育を拒否したりすることもある。

伝統的な意識にとらわれず、主体的に未婚のまま出産を決意したような場合には、子育てには積極的、肯定的な気持ちをもつであろう。

未婚である場合には、しばしば、経済的な困難や疲労をもったり、周囲から批判的な態度を向けられたりする。家庭に対する経済的、心理的な支援と、周囲が偏見にとらわれないことが望まれる。未婚の母と

して、子どもとふつうの親子関係を経験している例が少なくないことを銘記すべきであろう。

2) 離別

(1) 死別

親の死亡は、子どもに大きな影響を与える。しかし、子どもの年齢、長患いによる病死なのか、まったく予期せぬ事故死なのかでは、影響も異なる。

事故による突然の死亡では、親の死を迎える心の準備ができていず、子どもはトラウマ(心的外傷)をもち、悲嘆、怒りなどの感情をもちやすい。父親の死を理解し、受け入れるための「喪の仕事」(mourning work)が必要となる(奥山, 1991)。しかし、十分な対応がなされないことも少なくない。

父親の死は、子どもとともに、母親にも大きな影響を及ぼすものである。母親の心の状況が子どもに与える影響も大きい。

(2) 離婚

近年、離婚件数の増加がみられているが、離婚による父親不在、再婚による複雑な家族関係も、子どもに大きな影響を及ぼす。

とくに重要なのは、離婚にいたるまでの夫婦関係であり、両親の不和は子どもに不安、緊張、葛藤などを体験させ、安心感、安全感、安定感を剥奪してしまう。前述のように、父親の不在よりも、両親の不和と非行との関係が指摘されている。

未婚の母の場合と同様に、離婚した家庭に対する経済的、心理的な支援と、周囲の偏見にとらわれない態度が望まれる。とくに、離婚した男性が養育費を確実に支払うような制度の確立が望まれる。

離婚した父親との面会や、離婚事実の子どもへの告知も最近関心がもたれてきている。子どもも当事者として、情報を与えられたり、意見を表明する機会が与えられることが望まれる。離婚に子どもの意向がまったく反映されず、離婚後の親と面会もできなければ、子どもに「見捨てられ感」がもたらされよう。

3) 父親役割の不在

父親は家族の一員であるが、父親役割を十分果たしていないと思われる場合がある。例えば、長時間労

働で子どもとのかかわりがほとんどもてなかつたり、長期に出張中であつたりするような場合である。このようなときには、母親が父親イメージを子どもにどのように伝えているかが重要であろう。子どもには父親の肯定的イメージを伝えたい。また、電話、手紙などで、交流し、継続的な関係をもつことが大事であろう。

4 まとめ

父親不在の子どもの心の問題への対応を考えるならば、まず母親への支援の充実をはかる必要がある。前述のように母子世帯が抱えるもつとも大きな問題は経済的な問題であり、母親の経済的支援、就労支援が望まれる。

次に、父親不在であれば、子育てを母親一人が担うのではなく、親族や周囲の人を含めた子育て支援が必要であり、母親が息抜きできたり、短時間子どもをあずけられたりするような制度や、身近な相談の場の充実が望まれる。

もう一つ重要なことは、ひとり親家庭への差別、偏見の解消をすすめることである。かつては、ひとり親

家庭は「欠損家庭」「崩壊家庭」として、通常の家ではないかのようにみられてきた。しかし、家庭のあり方は多様化してきている。ひとり親家庭を「再建家庭」(田中, 1997)とみることが提言されてもいる。父親不在で困難な生活を送っている人に余分な負担を感じさせないようにしたいものである。

文 献

- 1) Douglas, J. W. B.: Early disturbing events and later enuresis. in Kolvin, I, et al. (eds.) : Bladder control and enuresis. London : Heinemann, 1973 (大藪 泰 : 排泄行動の心理と臨床. 二木武ほか(編著) : 新版小児の発達栄養行動. 医歯薬出版, p. 295—315, 1992 からの引用)
- 2) 厚生省大臣官房統計情報部 : 国民生活基礎調査. 1998
- 3) 厚生省児童家庭局 : 全国母子世帯等調査結果の概要. 1995
- 4) 牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子(編) : 子どもの発達と父親の役割. ミネルヴァ書房, 1996
- 5) 奥山真紀子 : 親の死に対する子どもの mourning. 小児の精神と神経, 31 (2) : 123—129, 1991
- 6) 大野祥子 : 父親であること. 柏木恵子(編) : 結婚・家族の心理学. ミネルヴァ書房, p. 149—184, 1998
- 7) Rutter, M. : Maternal deprivation reassessed. London : The Penguin Books, 1972 (北見芳雄・佐藤紀子・辻祥子訳) : 母親剝奪理論の功罪. 誠信書房, 1979
- 8) 田中玲子 : ひとり親家庭の子どもたち. 平湯真人(編) : 家庭の崩壊と子どもたち. 明石書店, p. 111—142, 1997